人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校としての点検・評価が組織的に行われ、ＰＤＣＡサイクルが効果的に機能している実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

岩手県北上市

○学校名

北上市立和賀西小学校

○学校のＵＲＬ

なし

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各１学級、【特別支援学級】１学級、【合計】７学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】８６人（平成２６年１１月２５日現在）
（内訳：１年生 12 人、２年生 16 人、３年生 13 人、４年生 13 人、５年生 15 人、
６年生 17 人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成２５年度　人権教育研究指定校事業指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
◎たくましくはばたく子の育成
ねばり強く考え学ぶ子・思いやりのある子・進んで体をきたえる子
【人権教育に関する目標】
自分を大切にし、他の人を大切にする笑顔いっぱいの子供の育成
～好ましい言葉遣いに向けた環境づくり、授業づくりの取組を通して～

○人権教育に係る取り組み一口メモ

好ましい言葉遣いや授業づくりへの取組を通して人権教育に取り組んでいる。今年度は保健便りや講演会など地域への啓発にも力を入れた。

○人権教育にかかる取り組みの全体概要

（１）よい言葉を使う取組の推進（担当:研究部・生徒指導部）
（２）児童会や縦割り活動と協力した取組（担当:生徒指導部）
（３）一人一人の学びの場と児童間の交流を大切にした授業づくり（担当:研究部）
（４）道徳授業と人権教育とを関連付けた指導の推進（担当:教務部・研究部）
（５）外部機関との連携による津波被災地訪問、人権についての講演会
（担当：教務部・生徒指導部）

３．特色ある実践事例の内容

１　はじめに

本校は小規模校であり、人間関係も固定しがちである。そのため、自分の思いを相手に伝え、積極的にコミュニケーションをとることを苦手とする児童も多い。

こうした実態をふまえ、昨年度から「好ましい言葉遣い」を中心に学校環境づくりに努めてきた。「言葉の月目標」、「一人一人の学びを大切にした学習活動の工夫」、「被災地訪問」などの取組を通し、体験的に人権尊重の意識を育てたいと考えた。その結果、進んでコミュニケーションをとろうとする姿が見られるようになり、自分の気持ちや思いを表現することに自信を持てるようになってきている。

そこで、更に児童の意識の維持向上を推し進めていくため、言葉遣いを中心とした学校環境作りと並行して、授業を通した人権教育も進めたいと考えた。今年度は、道徳授業を中心として、児童がより一層好ましい人間関係を構築し、自他の人権を守ろうとする実践的な態度を身に付けさせる取組を行った。あわせて、保護者や地域住民にも児童の変容について発信し、家庭、地域の連携の中で更に効果的に人権教育を推進したいと考えた。なお、取組を進めるに当たっては、関係する教務部、生徒指導部、研究部の３つの分掌が取組を分担して進めることとした。

２　具体的実践内容

（１）よい言葉を使う取組の推進（担当:研究部・生徒指導部）

ア　教師による人権劇

５月の全校朝会で、教師による人権劇「名前を大切にすることは、相手を大切にすること」を行った。これは５月の言葉の月目標「名前を丁寧に呼ぼう」の内容と、昨年度取り組んできた「ふわふわ言葉、ちくちく言葉」の取組を紹介する劇であった。意地悪な呼び方をする担任の先生たちのシーン、副校長と養護教諭が扮したお父さんとお母さんが、もうすぐ生まれてくる赤ちゃんの名前を考えているシーンなどを子供たちは食い入るように見つめていた。劇中では、どんな呼び方や言葉遣いがよいのかを子供たちに投げかけ、考えさせることができた。

イ　言葉の月目標の取組

言葉の月目標は児童の実態から、幾つかの目標を見直して今年度も取り組んでいる。例えば５月の目標は「友達の名前を正しく呼ぼう」から「丁寧に呼ぼう」へ、11月は「正直な気持ちを話そう」から「上手に気持ちを伝えよう」へと、相手の気持ちを考えながら取り組めるようにした。各教室・職員室前・職員室内に掲示することで、児童も教師も意識するようにしている。月末には「振り返りカ

ード」に一人一人が反省について記入するようにしている。高学年は自己の変容を比べられるように自己評価欄を工夫して取り組んだ。また、振り返りカードの内容や児童の実態を受けて、朝学習の１５分間で、以下の取組を学級で行う等、日々の生活に、振り返りカードを生かす指導を意識して行った。

振り返りカードを生かした学級での指導

①　今日のテーマ「名前を丁寧に呼ぼう」を知る
②　ちくちく言葉を示す
③　隣同士で**ロールプレイ（1）**をする
　＊ちくちく言葉で言われると嫌な気持ちになることに気付く
④　隣同士で**ロールプレイ（2）**をする
　＊ちくちく言葉の前に「～さん」という丁寧な呼び方を付けると、語尾が優しい言い方になったり、ちくちく言葉が言いにくくなったりすることに気付く
⑤　まとめ「名前を丁寧に呼ぶとふわふわ言葉になる」
⑥　ふりかえりとチャレンジ週間の説明
　＊指導後「名前を丁寧に呼ぶ１週間」として日常化に取り組む

児童の感想より

言葉の練習をする前は、ちゃんと「さん」を付けて呼んでいなかったけど、練習をしてからはちゃんと「さん」を付けて呼ぶようになったのでよかったです。

ウ　保護者・地域に向けた情報発信、啓発への取組

人権教育に関わる様々な取組は、昨年度に引き続き校報「わがにし」や学級通信により、保護者や地域住民に知らせるようにしてきた。また、今年度は保健室からの発信にも力を注いだ。４月に各家庭から協力いただいた、「名前の由来」を毎月保健だよりで取り上げ、一人一人が願いや思いを込められた存在であることを紹介した。「一人一人の名前の由来」は、誕生月ごとに職員室前に掲示。このほか道徳指導に合わせて「いのちの誕生」の様子を保健室前廊下に掲示した。歯磨きポスターや標語など子供たちの取組も名前入りで校内に飾られるなど一人一人を大切にする教育を意識した掲示が行われた。８６名の小規模校ならではの取組で、児童だけでなく保護者や地域の方々も行事や授業参観などで来校するたび目を留めていた。

【保健室前の様子】

【学年棟の廊下掲示】

（２）児童会や縦割り活動と協力した取組（担当:生徒指導部）

ア　児童会による「笑顔大賞」の取組

「笑顔大賞」は、児童会執行委員会が提案して始めた取組である。子供たちはふわふわ言葉への取組の中で、みんなが笑顔でいることの大切さに気付いてきた。そして、「学校が笑顔でいっぱいになるように、みんなの笑顔を集めて歩こう」とデジタルカメラで写真を撮り掲示した。休み時間だけでなく、給食時間や朝のあいさつ運動の時間と撮影場面は広がりを見せている。また、写真を撮るだけだった活動に、笑顔の理由の取材も加わり、多目的ホール前の掲示板いっぱいに子供たちの笑顔の写真が並んでいる。

【笑顔大賞】

【代表委員会の様子】

イ　縦割り活動の中での取組

本校では、前期は１・６年、２・５年、３・４年と兄弟学年での遊び交流を行い、毎年１０月以降は縦割り班を組織して、毎日の清掃活動や週２回の業間体力づくり（長縄跳び）の取組を進めている。これらの活動の中でも、ふわふわ言葉を意識して話せるように進めている。

【遊び交流の様子】　　【業間体力づくりの様子】

（３）一人一人の学びの場と児童間の交流を大切にした授業づくり（担当:研究部）

「聞き名人　あいうえお」「お話名人　かきくけこ」に全学年で取り組んだことで、言語環境が整ってきたが、発達段階や児童の実態に合わせて、内容の見直しが必要となってきている。そこで、例えば高学年では、聞き名人の「い」「え」を「考えながら」として取り組み、成果を上げている。

また、一人一人が主体的に学習に取り組めるように、全学年が授業にハンドサインを取り入れるようにした。自分の意思を表示すること、自分と友達の考えを比較すること、互いの考えをつなげることに役立っている。

（４）人権を取り扱う道徳授業の推進（担当:教務部・研究部）

人権にかかわる価値を含む道徳授業を重点として取り組んできた。そのため今年度は道徳教育の全体計画の見直しを図るとともに、別葉づくりにも取り組み、道徳の時間の指導が各教科や領域、行事等とどうつながっているのか作業を通しながら研修を深めることができた。１０月は４年生以上の被災地訪問が予定されていたので、全学年で「生命尊重」について重点的に指導を行うこととした。１１月のオープンスクールデーには保護者だけでなく地域の方にも道徳授業を見ていただいた。

【「名前はこうやってつけられたのよ」】

【先生にも「ふわふわ言葉」をあげるね】

（５）外部機関との連携による指導（担当:教務部・生徒指導部）

ア　津波被災地訪問

台風のため延期となっていた岩手県陸前高田市訪問を１１月に実施し、４～６年生４５名で訪問した。今年度は事前学習として、高田小学校の被災からの１年間を綴ったＤＶＤを見せたり、奇跡の一本松の本を読み聞かせしたりし、ねらいを明らかにして被災地訪問を行った。

【読み聞かせの様子】

奇跡の一本松、津波の被害で跡形もなくなった市街地、山から削り出す土で造成し、復興に向かう被災地の様子などを見学した。また、被害を受けたホテルの職員の体験談や復興に向かう思いを生の声で聞くことができた。子供たちは話を聞いた直後にその場で感想を書くことで、見学したことや聞いたことを自分の言葉でまとめることができた。

【地元のホテルの支配人さんのお話】

【お話直後に感想の記入】

事後指導では、全体で各学年代表の感想を交流した後、事前指導で見たＤＶＤをもう一度視聴した。被災地訪問や事後の学習を通して被災地のことを知るだけ

でなく、「今までは、当たり前だったけれど、その当たり前ということをもっとよく考え、これからも暮らしていきたいと思いました」「自分にできることがたくさんあるんだなあと思いました」と、自分たちの生活に目を向けることができるようになってきた。その場所へ行って実際に目にした経験、当事者の話を生で聞いた経験は子供たちの心に強く残るものとなった。また、被災地訪問の様子や児童の感想は、校報や学級通信で地域に発信した。

被災地で書いた児童の感想より

・一本松は、テレビで見たことがあったけど、実際に見たのは初めてでした。思っていたよりも、大きいなあと思いました。7 万本もあった松の中からあの松の木だけが残ったのはすごいと思います。

・一本松の近くにあった川から潮のにおいがしました。陸前高田の町は、全部が工事をしていました。工事の音しか聞こえませんでした。全部に津波が来たんだなあと思いました。

・津波が来た後の引き波は威力が強いと聞いて、体がぞくぞくしました。

・陸前高田の景色を見ると、どこまで津波が来たのかがわかるし、高いところから見てみると、家も少ししかなくて、機械が動いている音を聞いても、景色を見ても悲しい感じがしました。

・地元ホテルの方や教育委員会の方のお話を聞いたら、津波を経験した人にとっては、あたり前のことは幸せでうれしいんだなと思いました。学校に行けるのも、幸せでうれしいことなんだなあと思いました。

・仮設住宅や一本松のことを教えてもらいました。仮設住宅があって校庭で思いっきり遊ぶことのできない小学校があると聞いて、大変だなと思いました。わたし達があたり前だと思っていることも、陸前高田市の人達にとっては、「ありがたいこと」だと言っていたのが心に残りました。

・災害にあう前の陸前高田市の街の景色が写真で残されてありました。それを見て私は、災害がある前の陸前高田はいろんなお店があったのに、今日の景色が全く違っていたので、すごく悲しかったです。地域の人はもっと悲しいと思います。今は、町を高くするために工事をしていました。がんばってほしいと思いました。

イ　人権についての講演会

１１月のオープンスクールでは、４～６年生対象に「“こころ”と“いのち”」を考える講演会を行った。ＰＴＡ校外厚生委員会からの呼びかけもあり、保護者も一緒に講演を聞く機会となった。息子さんからの生体肝移植を受け、３か月と言われた命が１０年経っても続いているという畠山幸枝先生（“こころ”と“いのち”を考える会）のお話から、命の大切さを考えさせることができた。

【これが肝臓です】

【“こころ”と“いのち”を考える講演会の様子】

児童の感想より

・私が特に心に残ったことは、肝臓を悪くしたけれど息子が半分くれて、生きていられたことです。「心臓」などは一つしかないので、あげることも、もらうこともできません。命は一つしかないということがわかりました。

・肝臓が再生することは、知っていました。でも、肝臓を渡せることは知りませんでした。話を聞いて命は本当に大切だなあと思いました。

・いのちを持っているというのは、本当に幸せだなぁと思いました。僕たちが今こうして生きていられるのも周りの人々に支えられながら、そして両親に恵まれているからだなぁと思いました。

４．実施する際に生じた課題及びその解決策

（１）１学期末の経営反省会で、人権教育の取組が２年目に入ったことから、単に継続するのではなく、子供たちを中心に据えて「もっと良いものに変えていく」という意識で取り組むことを確認した。

【学期末反省会の様子】

例えば２学期、言葉の目標「ふわふわ言葉で話そう」では、子供たち一人一人に「ふわふわ言葉」とはどんな言葉か具体的に考えさせた。子供たちは自分たちで考えた言葉を生活の中で使いながら、語彙を増やすことができた。学習の中でも、国語（５年「豊かな言葉の使い手とは」）で、豊かな言葉の一つとして考えさせたり、道徳授業（１年「りょうくんと一りん車」）の中で「勇気づける言葉」として、互いに伝え合わせたりした。

【ふわふわ言葉さがし】

このようにいろいろな場面をとらえ、取組を工夫することができた。

５．実践事例の実績、実施による効果

（１）教師の人権劇により、昨年度の人権教育の取組を想起させるとともに、新入生や新任職員との共通理解が図られ、人権への気付きの場となっている。

（２）人権教育を柱とした道徳教育の全体計画の見直しや別葉の作成において、重点項目を定めたことで指導の見通しが立ち、評価や改善の視点が明確になった。特に１０月は、被災地訪問を軸として、どの学年でも「生命尊重」を取り上げ、価値の自覚に効果的に迫ることができた。

（３）被災地訪問では、事前指導・事後指導の充実を図ることにより、４年生では明確な視点を持った見学ができ、５、６年生は、昨年度の大槌・釜石方面の被災地訪問と比較して考えることができた。また、事後指導を通して、「生活の中でできることは何か」と、自分たちの生活につなげていこうとする姿勢が見られるようになった。

６．実践事例についての評価

（１）今年度は、人権教育の取組を各分掌（教務部、研究部、指導部）に分担するだけでなく、昨年度の取組を踏まえ、子供を中心に据えた改善を図ることにした。分掌どうしにつながりをもたせたことにより、様々な場面でそれぞれの立場から積極的に子供に関わり、子供たちの間でも相手の立場を尊重しながら関わる姿が見られる等、年間を通した取組や評価が成果を上げている。各分掌による改善のための評価により、全校取組としての成果をわかりやすく共有した。

	平成２６年度 実践の柱	担当			実践の具体	前年度	平成２６年度			
		教務部	研究部	指導部			１学期	２学期	３学期	総合評価
1	よい言葉を使う取組		○	○	教師による人権劇	A	A			A
					言葉の月目標	B	A	A		
					情報発信（啓発）	B	B	A		
2	児童会や縦割り活動			○	笑顔大賞	B	B	A		
					異学年交流、縦割り活動	B	B	B		
3	授業づくり		○		聞き名人とお話し名人	B	B	A		
4	道徳教育の充実	○	○		全体計画の改善	B	B	A		
					別葉の作成	C	B	B		
5	外部機関等との連携	○		○	津波被災地訪問	A		A		
					講演会	B		A		
6	評価・改善	○	○	○	経営反省、学校評価	A	A	A		

評価は、A：良好で基本的に継続、B：改善で期待　C：要改善

（２）学期末や行事ごとの内容についての反省では、人権感覚を育てるために継続指導の必要性と同時に、続けることの難しさも感じた。今後も児童の変容や実態をとらえ、見直しを図りながら取り組んでいく必要性を感じている。

（３）１１月末の学校評価では、人権教育の取組に、保護者から３０余りの意見が寄せられた。昨年度からの継続した取組が、地域に広く浸透してきている。今後も家庭や地域と連携を図り、評価改善しながら取組を進めていきたい。

＜保護者からの感想より＞

・相手を思いやる気持ち、言葉はとても大切なこと。今後も子供たちに意識してほしいと願う。・間違った言葉を使い、直されながら思いやりの言葉を覚えていくのだと思います。・学校では意識しているようですが、家では言葉遣いがよくないので、注意していきたい。・時間に追われているときはついつい、きつい言葉が出てきたりする。・保健だよりの名前の由来では、親の愛情が感じられました。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

北上市立和賀西小学校
「好ましい言葉づかい」の習得に焦点を当てた学校環境作りと、授業を通した人権教育により、好ましい人間関係の構築と自他の人権を守ろうとする実践的態度の育成を図ろうとする取組である。具体的には「言葉の月目標」、「一人一人の学びを大切にした学習活動の工夫」、「津波被災地訪問」などの企画により、体験を基盤にした人権尊重の意識高揚を図りつつ、児童各自の主体的学習と学級集団としての共同学習を並行させる授業づくりに努めている。学校の取組を積極的に家庭、地域に向け発信し、地域ぐるみの人権教育推進に取り組んでいる点も示唆的である。